故ニ、其死ヲ不厭事如鵝毛也、別而武士ノ風俗如右ナレドモ、自然ニ國風ヲマヌカレント思フ人アレドモ、正智邪智ヲ不辨而、其辨ズルトコロニ從テ國風ヲ削ラントスルトイヘドモ、正道ニ至事不克而、或ハ不覺ヲ取リ、或ハ邪智ニ迷テ、臆病ヲナス人モ可有、多ハ勇勝而理闇キ形儀多シ、自然ト氣質之スナヲナル人モアルベケレドモ、稀ナリトシルベキナリ、

〔西遊雜記二〕豐後の國は、豐前よりも大國といへども、風土はおとりて宜しからず、在中に入ては、豪家と覺しき百姓一家もなく、白壁なる土藏などは遠見せし事なく、柿の木、橘、きんかん、柚なども見かけず、人物言語も中國筋とは甚劣りし事にて、在中山分に入ては、草履わらじもはかずして、外より歸りても洗ふといふ事もなく、其儘床上にあがる事なり、食物にも米を喰ふ事なく、粟の飯を以て上食とし、寺院軍正にても、平生の喰事は粟にして、五節句などに米の飯を食す事なり、是等の事を以万事の風俗を察して考るべし、周防長門より、豐後日向大隅などへ商人の入來る所にて、此者ども族宿にて會せし時は、最早日本の地へ歸らんと互に戯れ笑ふと云り、然れども花は芳野人は武士にて、城下々々は人物言語もいやしからず、中國筋に替りし事なきなり、在在へ入りては、何といはんやふもなき僻地多し、宇佐より頭城へ出るは南西とゆくなり、

名所

〔日本鹿子十四〕同○豐後國中名所之部

佐賀（サカ）の關　伊與の御崎より海上七り也

姫島（ヒメシマ）　北浦と云所也、東にみへたるはるかの沖也、松村々とうちつゞき、けいよき所也、

湯の嶽　府中より西なり、此山に溫湯あり、

三保浦　寶積　小竹島　高崎

〔西遊雜記二〕佐賀の關といふをば、外濱、內浦にては市中五百軒ばかり、よき船かゝりの湊ゆへに、日向大隅より海上往來の船、日和待をする浦にて、淋しからぬ也、倡家も數軒みへ侍りぬ、當世の